様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １０ 日現在

機関番号：１１６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８６０９

研究課題名（和文）福島県の児童のいじめ予防教育へのマティグリーカリキュラムの導入

研究課題名（英文）Mutt-i-grees curriculum for preventing bullying and suicide in Fukushima

研究代表者
内田　千代子（Uchida, Chiyoko）

福島大学・子どものメンタルヘルス支援事業推進室・客員教授

研究者番号：８０３１２７７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、米国で開発されたマティグリーカリキュラム改修版を、複合的なストレスにさらされた福島の小学生に試みた。これは、動物とふれあい、動物を題材にして子どもの精神的な発達と社会性を育もうとするカリキュラムである。向社会的行動の増加によるいじめ予防自殺予防への効果を明らかにしようとした。小学校1から3年生対象カリキュラムの日本語版を作製して、福島県内の学童保育で実施した。質問紙調査結果等からは、感情への気づきや感情のコントロールと対処に対してカリキュラムの教育的効果が考えられ、いじめ予防にも役立つ可能性が示唆された。
震災、原発放射線被害のあった福島での実施は、児童にも保護者にも有意義であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
動物と人間の相互交流とレジリエンスモデルに基づき、言語を介してでなく情動面へのアプローチを主にした、マティグリーカリキュラムを翻訳して我が国で初めて実施した意義は深い。感情への気づきや感情のコントロールと対処に対してカリキュラムの教育的効果が考えられ、いじめ予防にも役立つ可能性が示唆された。震災、原発放射線被害等複合的ストレスにさらされた福島においての実施は、児童にも保護者にも有意義であった。また、家庭と学校を繋ぐ地域の教育機関である学童保育での試みはコミュニティでのアプローチの重要性を示した。さらに、コミュニケーションが困難な発達障害のある子らへの適用の意義が認められた。

研究成果の概要（英文）：Mutt-i-grees Curriculum (MC) teaches social and emotional skills to children, highlighting pets at shelters and using activities about animals. MC is based on the research on human-animal interactions and psychological theory of Emotional Intelligence (EI) and Social and Emotional Learning (SEL), which focus on facilitating children’s self- and social-awareness, relationship skills, and problem-solving abilities. It is also an approach to humane education. We executed MC for the children of the After- School Programs in Fukushima, where people have been under complex stress after the earth quake and explosion of radiation plant of Fukushima Daiichi. We tried to clarify that MC is effective to prevent bullying and suicide and promote mental health status of children in Fukushima. It showed that MC helped children to identify feelings and learn strategies to manage impulses and that these skills should consequently enhance proactive behavior to prevent bullying and suicide.

研究分野：精神医学、　自殺予防、発達障害、特別支援

キーワード：いじめ予防　自殺予防　子ども　動物介在教育　レジリエンス　福島放射線被害　共感　コーピングスキル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国での、いじめを苦にした小中学生、高校生の自殺の問題は減少する兆しを見せない。

研究代表者のこれまでの調査研究、および実践の中で、大学生の６パーセント以上が自殺念慮を抱いたことがあること、小中学校、高校時代の**いじめ経験**と**自殺関連行動**には深い関係があり、成長後も深い傷として残ることが明らかになった。被害者だけでなく、加害者、傍観者の自殺のリスクも高める。**いじめ予防は自殺予防のためにも必須**で、できるだけ早く、**小学校で行う必要**があると考えた。

小中学生への適切な心理教育プログラムを検討していた時に、マティグリーカリキュラムの開発者で、米国のエール大学、フィン-スチーブンソン博士に推薦され、ニューヨーク市公立小学校での、捨てられ保護された動物を介在させたマティグリーカリキュラムに参加した。荒廃した地区にある学校の生徒にとってこのカリキュラムが生徒の態度を落ち着かせ、暴力やいじめを防止するのに非常に効果的な教育手法であることを実感した。一方、前任地の**福島**においては、**放射能の影響**で仮住まいを余儀なくされたり、家族が別居せざるを得なくなったりなど、**児童の心を傷つけやすい状況**があった。**環境が破壊された場所**で生きていかねばならないという、共通の問題をこれらの児童はかかえていると考えられ、福島に米国の**マティグリーカリキュラムを導入**することで、いじめ予防、いじめ自殺予防への効果が期待されるという構想を持つに至った。

わが国では道徳教育の中でいじめ予防教育が試みられている。言語を介して教える方法が主流であり、情動面への影響は不十分と考えられる。**マティグリーカリキュラムは、動物と人間の交流に関する研究成果を基に**している。犬は多くの場合、人を幸福にさせ、教室の雰囲気を和ませる。愛情ホルモンといわれるオキシトシンは、犬と人の交流に際しても双方に分泌されるといわれる。心理学的理論としては、社会性と情動の学習（SEL）とレジリエンス（立ち直る力） モデルに基づいて作られており、ソーシャルスキルと情動的なスキルを教えて、**思いやり教育**を行うものである。児童生徒は、**自分自身や他の人の気持ちへの気づき、問題解決能力やチームワークに必要なスキルを身につけ**、自信のある、思いやりのある子に成長するのを助けるという。このプロセスはいじめ予防教育としても機能すると考えた。フィン-スチーブンソンらの研究結果から非実施群と比べて、実施群の児童生徒の**共感性と社会性のある行動（向社会行動）**の点数が有意に高かったという。

２．研究の目的

米国で開発された**マティグリーカリキュラム**改修版を、複合的なストレスにさらされた福島の小学校で試みる。これは、保護された**動物とふれあい、動物を題材**にして、**子どもの精神的な発達と社会性を育もう**とするカリキュラムである。**動物と人間の相互交流についての**研究と、**社会性と情動の学習（SEL）**と**レジリエンス**モデルに基づいて、ソーシャルスキルと情動的なスキルを習得させる方法である。自分の感情のコントロールと共感性や思いやりの心が育ち、悲しんでいる人を助けたり、喧嘩を止めたりするような社会性のある行動が増えて、**いじめ防止**に役立つことを明らかにする。被災地福島の小学生のメンタルヘルス改善にも役立つことを明らかにする。

３．研究の方法

マティグリーカリキュラムの開発者で、米国エール大学、フィン-スチーブンソン博士の指導を受け、日本の現状に適した改修版カリキュラムの作成についての議論を重ねた。翻訳を行い、小学校１年生から３年生対象カリキュラムの日本語版を作製した。また、生徒用、指導者用の質問紙を翻訳し、我が国の現状に適切な質問紙を作成した。保護者向けの質問紙は独自に作成した。当初、教師対象プログラムも作成を考えていたが、オリジナルに沿って、小学生対象プログラムのみ作成した。

5つのテーマ(　１.自己認識を高める　２.感情を認識する　３.共感を促す４.協調精神を育む　５.意思決定する力を養う)についてそれぞれ5セッション、合計25回のカリキュラムを、小学校3年生のクラスで授業時間内に実施することを予定していたが、道徳の時間等に実施可能な福島県内の小学校を見出すことができなかった。「放課後児童健全育成事業」の学童保育の協力を得て、実際の動物を同伴しない条件で実施となった。学童保育の児童小学1年から６年生（主に1－4年生）を対象に、それぞれのテーマにつき2セッションずつのカリキュラムを実施した。事前に、指導者にカリキュラムの説明を行うとともに、保護者にも文書で説明し、カリキュラム導入に同意する署名を得た。指導者と児童に実施前後での質問紙調査を行った。保護者には実施後の質問紙調査を行った。指導者にはインタビュー調査も行った。　研究に関して、福島大学研究倫理委員会の承認を得た。

現職教員（92 名、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、その他で、研究代表者の特別支援教育講習履修者）に対し、動物介在教育、及びマティグリーカリキュラムについての質問紙調査を行った。米国と同じカリキュラムを小学校で行うことを企画したが、多くの関係者を通して学校に依頼したにもかかわらず、実施協力を承諾してくれる学校を見つけることはできず、「放課後児童健全育成事業」の学童保育での実践が可能となったが、実際の動物を登場させることはでできなかった。現場で教育にあたる教員に質問紙調査を行い、我が国の実情とマティグリーカリキュラム実施の可能性を知る一助となることを期待した。

４．研究成果

（１）現職教員への質問紙調査の結果

動物介在教育についての質問について、「子どもにとって良い影響を与えると思う」教員は 9 割近くであったが、実際に行ってみたいと考えるのは 4 割弱であった。「不安に感じる点や困難に感じる点」としては「病気の感染やアレルギーが心配」が約 8 割、「動物の扱いや飼育の方法が不安」が 4 割であった。自由記述欄で「教員の負担が大きくなる」「周囲からの理解が難しい」「勤務体制上難しい」「運営面での整備が難しい」など、教員の負担や学校の運営体制上の問題などを挙げる声もあった。マティグリーカリキュラムについて、「マティグリーカリキュラムは子どもにとって良い影響を与えると思いますか」という質問では、9 割近くが良い影響を与えると認識し、実際実施してみたいと考えているのは 6 割弱であった。「実際に現場で動物を使用できると思うか」には 4 割弱が思うとし、「実際の動物は私用せず動物を題材にした教育のみを行ってみたい」が 5 割弱であった。「このカリキュラムを実際にあなたの学校で行う場合、何回可能と思いますか」には、1－5 回が 5 割弱、6－10 回が 4 割弱、11 回以上はゼロであった。

動物と接触し世話をするような体験が子どもに良い影響をもたらすと考える教員は多い。動物介在教育というと実際に飼育することも含まれて負担が大きいが、外部からの動物となるとハードルが下がる。それでもアレルギーや衛生面の心配もあるのが実情である。このカリキュラムを実践したいと思う教員は多いが、動物を実際に使用できると考える教員は半分以下である。またカリキュラムの回数も米国でのオリジナル 25 回を遂行するのは著しく困難な状況が想像できた。米国の小学校で、なぜ 25 回可能なのか？なぜ日本で困難なのか？米国の小学校教育は、カリキュラムの自由度が高く、日本ほど多くの内容を詰め込まないし、規制も受けない傾向にあるといえる。良い面ばかりではないかもしれない。地域によって荒れている学校も多く、このような教育プログラムの必要性に迫られているともいえる。マティグリーカリキュラム実施を通して日米の教育環境や教育理念の違いが明らかになった。

（２）児童、保護者、指導者の反応

概ね、児童はカリキュラムを楽しんだことが理解された。特に、動物を題材とした工作を伴うセッションは人気で、発言も活発となった。質問紙調査結果からは、楽しかったこととして、パペットを作ったこと、好きな人の絵を紙皿に書いたことという児童は多かった。犬の感情を読むこと、感情をみること、というように感情について考えたことをあげる児童も多く、犬の画像を見て犬がどう思っているのか班に分かれて考えたこと、発表したこと、というように、他の児童と話し合ったり発表したりした経験をあげる児童も認められた。役に立ったこととして、感情を学んだ、犬の感情としっぽ振りなどの動作の関係を知った、犬にもいろいろな感情があると知った、というように、やはり感情に関するものが多く認められた。また、怒ったときに深呼吸を 3 回して鎮めることを知った、というものもあった。感情に気づくこと、感情のコントロール、感情の対処に対してカリキュラムの教育的効果が考えられ、いじめ予防にも役立つ可能性が示唆された。

2011 年の震災および原発放射線被害についての保護者へのアンケートでは、出産の前後に震災を経験した保護者にとってのストレスは非常に大きいことが窺われた。子ども達の健康への不安はもとより､外で自由に遊ばせることができず､自然を謳歌することができなかったことや、ストレスを抱えながら子育てをしたことへの負い目のような気持ちも認められた。また、こどもたちが、落ち着きがない、怒りっぽい、と感じている親が多数認められた。

ほとんどの児童は、マティグリーパペットや好きな人の絵を紙皿に書いたりした工作について家庭でも楽しそうに話していた。また、家庭で、感情について話す機会が持てたこと、友達との関わりについてや、自分の怒りの鎮め方、他の人が落ち込んでいるときにどうしたら気分をよくすることができるかなどについても話す機会を持ったことを報告している保護者が多かった。学校でもこのカリキュラムのような教育が継続して行われるとよいと希望している。このように、保護者が普段気にかけていた子どもたちの感情コントロールと対処について検討する良いきっかけとなったと考えられる。

学童保育の指導者は、児童が楽しんでいたことを何よりも喜んでいる。指導者は、児童が学校で勉学や友人関係でストレスを感じる状況にないか、家庭での保護者との関係などに思いをはせ、学童保育が児童の心の安定に役立つ場であることを願っている。いじめる側になってほしくない、いじめを止める子になってほしいと願い、マティグリーカリキュラムがそのために役立つと感じている。ただし、継続してこそ身につくものであり、学校でさらに継続できないものとかと期待している。

（３）発達障害のある児童、特別支援の必要な児童生徒への応用

カリキュラム実施において、発達障害のある児童の様子から、今後このカリキュラムを発達障害のある子らに適用する意義が推測された。言葉でのコミュニケーションが難しい児童に、言語でないやり方での教育として、マティグリーカリキュラムに親和性があるのは明らかである。ゆっくりペースで時間をかけて指導することでより大きな効果が期待できる。

（４）福島における実施の意義など

児童の不安を減少させることを目的の一つとしたが、親の不安は思いのほか高く、このカリキュラムの実施は親の不安の減少に少なからず影響したと考えられる。保護者が気にかけていた、感情コントロール、学校では行っていない感情対処技能教育を、動物素材を用いることにより会得しやすい形で実施できたと考えられる。震災、原発放射線被害のあった福島においての実施は、児童にも保護者にも有意義であった。

小学校の同学年クラスにおいて、多くの児童に全カリキュラム実施するには至らず、マティグリーカリキュラムによって「向社会的行動」が増加して、いじ予防に役立つという判定は困難であるが、その可能性が十分認められた。

米国で開発された、動物と触れ合い、動物を題材にして子どもの精神的発達と社会性を育もうとするマティグリーカリキュラムを、我が国で試みたことは大きな成果である。

学童保育は、家庭と学校を繋ぐ地域の教育機関であり、少子化核家族から成るコミュニティにおいて児童に重要な役割を有する。

＜参考文献＞

Mutt-i-grees® Curriculum, Copyright©2010 The Petsavers Foundation

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 内田千代子	４．巻 15
２．論文標題 精神医学、精神医療の立場からの支援、特集ニーズのある子ども達の未来を考えるー支援のあり方を巡って	５．発行年 2019年
３．雑誌名 星槎大学紀要（Seisa Univ.Res.Bul.）共生科学研究	６．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Shimizu, T., Hirose, K., Uchida, C., Uchida, T.	４．巻 526
２．論文標題 Growth arrest specific protein 7 inhibits tau fibrillogenesis.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 10.1016/j.bbrc.2020.03.041	６．最初と最後の頁 281-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.bbrc.2020.03.041.	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田千代子	４．巻 34（2）
２．論文標題 ひきこもりの日米比較	５．発行年 2019年
３．雑誌名 精神科	６．最初と最後の頁 150-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田千代子	４．巻 14
２．論文標題 原発事故後の福島県の大学生の精神保健の実態調査および心理教育の効果	５．発行年 2018年
３．雑誌名 福島大学研究年報	６．最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内田千代子	4．巻 44（1）
2．論文標題 ひきこもりの精神療法	5．発行年 2018年
3．雑誌名 精神療法	6．最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Shimizu Taiki、Kanai Kenta、Sugawara Yui、Uchida Chiyoko、Uchida Takafumi	4．巻 9
2．論文標題 Prolyl Isomerase Pin1 Directly Regulates Calcium/Calmodulin-Dependent Protein Kinase II Activity in Mouse Brains	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Frontiers in Pharmacology	6．最初と最後の頁 1351
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fphar.2018.01351	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hidaka Masafumi、Okabe Emiko、Hatakeyama Kodai、Zook Heather、Uchida Chiyoko、Uchida Takafumi	4．巻 505
2．論文標題 Fluorescent resonance energy transfer -based biosensor for detecting conformational changes of Pin1	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Biochemical and Biophysical Research Communications	6．最初と最後の頁 399～404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.bbrc.2018.09.123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hidaka Masafumi、Kosaka Keita、Tsushima Saori、Uchida Chiyoko、Takahashi Katsuhiko、Takahashi Noriko、Tsubuki Masayoshi、Hara Yukihiko、Uchida Takafumi	4．巻 499
2．論文標題 Food polyphenols targeting peptidyl prolyl cis/trans isomerase Pin1	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Biochemical and Biophysical Research Communications	6．最初と最後の頁 681～687
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.bbrc.2018.03.212	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田千代子	４．巻 44（1）
２．論文標題 ひきこもりの精神療法の倫理	５．発行年 2018年
３．雑誌名 精神療法	６．最初と最後の頁 74-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Uchida Chiyoko、Uchida Mai	４．巻 19
２．論文標題 Characteristics and Risk Factors for Negative Academic Events	５．発行年 2017年
３．雑誌名 The Primary Care Companion For CNS Disorders	６．最初と最後の頁 17m02123.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4088/pcc.17m02123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Uchida Chiyoko、Uchida Mai	４．巻 78
２．論文標題 Characteristics and Risk Factors for Suicide and Deaths Among College Students	５．発行年 2017年
３．雑誌名 The Journal of Clinical Psychiatry	６．最初と最後の頁 e404-e412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4088/jcp.16m10807	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 内田千代子	４．巻 38
２．論文標題 限局性恐怖症	５．発行年 2017年
３．雑誌名 別冊日本臨床	６．最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小野寺裕子、内田千代子
２．発表標題 「自閉症スペクトラム障害はトラウマを受けやすいか？」
３．学会等名 日本不安症学会
４．発表年 2018年～2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 内田千代子他分担執筆、精神保健福祉養成セミナー編集委員会編集	４．発行年 2017年
２．出版社 へるす出版	５．総ページ数 354
３．書名 精神保健福祉養成セミナー２（第6版）精神保健学ー精神保健の課題と支援　(第3章・Ⅴ思春期青年期精神保健対策/第4章・Ⅰ家庭における精神保健・Ⅱ学校における精神保健)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考